



明治初年日本人フランス留學生総代(松江出身)

博士 入江文郎

— 事績と資料(一) —

田中隆二

目次

はじめに

事績

一、漢学の素養と蘭学修行

二、フランス語研修と教授

三、明治初年日本人フランス留學生総代

資料

一、資料概要

(A) 入江家所蔵資料

(B) その他の資料

二、本篇掲載資料

(A) 日本人の写真(氏名不詳のもの)

(B) 西洋人の名刺

おわりに

注

はじめに

入江文郎はフランス人通訳アンリ・ヴーヴ(Henri Weuve)に師事して、実用フランス語の学習を一八六〇年には既に開始している。幕末の我が国では未だ稀な本格的フランス語学者であった。

入江文郎に関しては、土屋政朝により、明治二十四年に『入江文郎先生之傳』<sup>(1)</sup>が書かれ、その後、藤田東一郎、桃裕行、高橋邦太郎、富田仁、田中貞夫の諸氏が、いろいろな角度から研究・調査を行って来ている。入江家所蔵の資料も早くから注目され、藤田東一郎はじめ各氏の労作で部分的には既に紹介されている。

本篇及び続篇は、その入江家所蔵資料をできる限り多くまとめて収録するために計画されたものである。その目的は、第一に、貴重な資料の散逸を防ぐためであるが、第二には、今後追求さるべき問題を確認すること、また、資料公表により、研究・調査が一層拡大することが期待されることにある。

筆者は、これまでも機会ある毎に繰り返し述べて来た通り、我が国の初期・フランス語学者の学習の実態、学力の程度に、就中、深い関心を抱いている。前者は別としても、少くとも後者即ち学力に關しては、入江文郎は稀有の資料を残している。今後入念な調査が実施されれば、前者即ち当時の学習の実態についても新たな発見が望まれ得る。入江文郎は日本におけるフランス学研究者にとって、非常に貴重な研究対象である。

筆者は、松江市に所在する島根大学に奉職することにより、偶然ながら松江と縁を有することとなった者として、もともと松江出身

のフランス語学者・入江文郎に興味を抱いて来た。その意味では、江戸の松江藩邸で文郎を中心として行われたと推測されるフランス語学習に關しては未だ何の調査もなし得ていないのは誠に遺憾である。この度、十数年間の長きにわたりお世話になった松江を離れ、古巣とも言ふべき広島に復帰することとなった。そこで、永年の宿題を果す心境に漸く達し、入江文郎について、懸案の「事績と資料」をまとめるに至った。その結果、松江出身の入江文郎というだけでなく、もつと範囲の広い、明治初年の日本人フランス留学生総代としての入江文郎を筆者は再認識したのである。

入江家所蔵資料の中には当時フランスで文郎と交際のあったと推測される日本人の写真や名刺がある。その中に松江出身の庄司金太郎や飯塚納の写真を見出した時、筆者は松江出身の入江文郎をやはり強く実感した。それらの写真は筆者のこれまで見たこともなかったもので、同郷の留學生の写真だから、文郎も大切に保管していたと想像されたからである。しかし、広島出身の太田徳三郎や静岡出身の小野彌七、金沢出身の黒川誠一郎など、日本全国の各地から来ていた人々の名刺を目のあたりにすると、留学生総代としての入江文郎を、筆者はより強く感じざるを得ない。入江文郎に關してより深く調査・研究することは、我が国におけるフランス学のより広い研究につながると考えられるのである。

文郎はフランス語で書いた手紙の下書等を残している。これらを詳しく調査すれば、先述の学力の程度を明らかにすることに寄与すると考えられる。本篇では紙幅の都合で断念せざるを得ないが、続篇或いは続々篇では紹介したいと考えている。

## 事績

### 一、漢字の素養と蘭学修行

入江文郎の業績は我国における初期のフランス語学者として、専ら、フランス語の学習と教授の領域を開拓したことにある。またそれは、彼自身日本人フランス留学生として、明治初年、現地で一層フランス語研鑽に努めると共に、同朋の留学生達の総代として彼等の滞仏生活の便宜に助力したことにある。

しかし、フランス語学習以前、文郎は、当時の洋学者達の多くと同様、オランダ語を学んでいた。また、それより更に前、彼に漢学の素養があったことは、オランダ語及びフランス語学習の進歩に寄与するところ大なるものがあつたに違いない。残念なことに、そうしたことについては殆ど何も調査されていない。今後追究されるべき課題として、この冒頭で言及して置く。次に、文郎の事績を年月を追つて確認する。

入江文郎は天保五（一八三四）年四月八日出雲国島根郡松江に生まれた。父は入江元範、松江藩の医師であつた。母は飯島氏の出で、二人の間には一男一女の子供があつた。男子は文郎その人、女子はシズといい、文郎の姉である。文郎は幼名を萬次郎といったが、後に何度か名を改め、柳節、洽齋、観寮、文郎と称した。文郎は幼くして「藩費明教館」に入った。しかし、性来病弱であつたため勉強にたえず、暫時これを中断して療養に専念した。嘉永元（一八四八）年十五歳の頃病気が漸くなおり体も元氣になつたので、幼い者と一緒に初歩の句読の授業から受け直した。自分よりずっと年下の学童

から、文郎が年が多いにも抱らず学業の進まないのを嘲笑されたので、文郎はこれを恥じて藩費を去り、松江の支藩である出雲国能義郡広瀬に往き、同藩の藩儒山村黙齋に就いて二年間学んだ。「刻苦勵精」の甲斐あつて勉強が進んだので、嘉永三（一八五〇）年十七歳になつて、文郎は松江に帰つた。すでに「嶄然トシテ頭角ヲ露ス」存在となつていたので、以前文郎を嘲笑した者も皆文郎の「下風ニ伏シタ」ということである。文郎は、また、松江藩の藩儒妹尾謙三郎（雨森精齋）にも従つて勉強し、「高足」と称せられるようになった。

山村黙齋、妹尾謙三郎などに師事した文郎の漢学修行は、はじめに述べた通り、後年の蘭学・仏学修行に大に役立つと考えられる。山村・妹尾について調査すれば、当時の文郎の学習の実態が分る可能性はある。桃裕行「入江文郎と桃節山」（『仏蘭西学研究』第七号 昭和五十一年五月二十日 日本仏学史研究会 カルチャー出版社）はこの観点からして貴重な論考である。それによると、節山と文郎の交遊は「江戸が始めてでなく、すでに松江に在る時に始つてゐる。」とあるから、桃節山研究からも得られるものがあるであろう。それは今後に俟つこととして、「松江から江戸へと足掛け七年（文郎十八歳から二十四歳まで）にわたつた詩の贈酬から辿られる文郎・節山の交わりは、前に掲げた安政四年丁巳の文郎の送詩に終つてゐる」のであるが、これらの詩からも文郎の漢字の素養の一端が窺われるであろう。

ところで、こうした国許での勉強で満足しなかつた文郎は、「大都二遊学シテ」もつと学問を進めたいと望んでいた。たゞ、家が貧し

かつたので、なかなかその望みを果せないでいた。たまたま、藩医清水同仙が藩命を受け江戸に赴くことを聞いて、文郎は之と同行することを願った。父元範は文郎の志が切なるものであることを知り、家具を売って旅費を作ってやった。それで、文郎は同仙と共に江戸に出ることができたのである。嘉永七(一八五四)年文郎二十一歳のことである。これより、文郎は幕府の医官竹内玄洞に就いて蘭学を修め、かたわら「横文の謄寫」をして学費を補った。尚、「嘉永七年甲寅春出国江戸岩名昌山へ入塾」ともある。安政四丁巳九月(一八五七年七月)<sup>(2)</sup>父元範の病が重い事を聞き、文郎は急遽江戸を出発した。廿四歳の一介の書生であったので、旅費に困り、途中で腰刀を売った。しかし、大坂に到着する前に無一文となり、一晚野宿せねばならなかった。大坂で、偶然当地に来ていた松江藩の家老・三谷權太夫と出会い、權太夫の情で、腰刀・衣服・旅費を恵与され、文郎は帰国することができたが、父元範は既に死亡していた。藩主松平定安公は文郎に家を嗣がせ、「十人ロラ給シテ」藩医とした。翌年即ち安政五年戊午五月(一八五八年三月)文郎は向学心をおさえることができず、家を整理して再度江戸に遊学した。藩主定安公は「其勤學ヲ嘉賞シテ學資ヲ給」した。その後文郎は藩邸に伺候する度に西洋の「兵法醫術」の優れていることを説き、定安公は「大ニ悟ル所」があつて、時々文郎を召してその説く所に耳を傾け厚遇したという。

## 二、フランス語学習と教授

入江文郎がフランス語学習を開始した年月日は分っていない。藤田東一郎は「入江は、村上英俊の『三語便覧』の出した嘉永七年、一

八五四年以来、既に江戸にいたから、この間に佛語に志したもので、村上英俊には就かず、勿論、独学で、その学習をしたのであろう。」と推測している。このことも解決したい課題である。判明している

ことは、万延元(一八六〇)年庚申の冬、文郎が五十日の間横浜に遊学し、フランスの「通辨官ウューヴ」に従つてフランス語を学んだことである。もつとも、それを傍証する資料は伝記などには収録されていない。文久元年辛酉六月朔日(一八六一年四月八日)幕府の命令で文郎は番書調所の教授方となつた。しかし、病氣になつたので、「九月朔日始メテ命ヲ拜」している。これは先述の通り万延元年ウーヴWeuve氏に従つてフランス語を修めたからであろう。その時オランダ語とフランス語の対訳という方法で教えを受けたようである。そして、フランス語が分るようになり、またフランス語の教授法も会得したのであろう。文久二年壬戌三月(一八六二年四月)文郎は「外國方翻譯掛」を兼ねた。文久二年九月(一八六二年十月)文郎は百日間先述の「ウューヴ」氏に就いて再び語学と作文の研究をした。この時の様子は文郎自身のフランス語で書かれた手紙が残っているのでおよそのことが分る。この資料については高橋邦太郎「日仏の交流」でも述べられているが、田中貞夫『フランス学の研究』にフランス語原文・日本語訳文共掲載されている。ウーヴが文郎のこの学習の際、立会人として幕府の役人が同席することを拒んだことを示す資料も収録されている。文久二年十二月(一八六三年二月)文郎は松江藩邸での洋学教授も兼ねた。桃裕行「松江藩の洋学と洋医学」によると「藩士としての入江は、文久二年十二月二十七日即ち横浜より帰来した頃『公辺出役中定府被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>、且又西

洋学教授方被<sup>レ</sup>「仰付」候間、公邊御用透ヲ以可<sup>レ</sup>相勤<sup>レ</sup>旨<sup>レ</sup>を命ぜられた。即布野・間宮の藩邸教授任命旬日後のことで、布野の英学・間宮の蘭学・入江の仏学と陣容が整えられた。翌三年九月六日『西洋学教授方就<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>「仰付置」、御医師之名目被<sup>レ</sup>「差除」、尤医術家業ハ不<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>御免<sup>レ</sup>旨<sup>レ</sup>命ぜられたのは、布野・間宮の帰国の為、医師を罷め、洋学教授専任となつたのであらう。』とあり、文郎に師事してフランス語を学習した藩士はかなりの数いたと想像される。資料の章に出て来る庄司金太郎はその一人だと推測される。しかし、松江藩江戸藩邸での文郎のフランス語教授については何も分っていない。辻新次の伝記に、「先生（辻新次のこと。筆者註記）は開成所で、新たに佛蘭西學の攻究に没頭したが、正課だけでは何としても物足りず、課外に、小林鼎輔（惟徳）教授に就いて熱心に勉強した甲斐あつて、此の方面でもメキ／＼と頭角を現はして來たが、先生は、それでもまだ満足ができなかつた。幸ひに、其の頃江戸の藩邸では、事務多端のため人手が足りない處へもつて來て、時々病気で缺勤者があるの、その都度、先生が臨時補缺として引張り出される。若干の手當が下りる。加へて、製鍊所の方でも、再び先生を教授方世話心得に登用してくれたので、幾分学資にも餘裕ができたところから、先生は更に進んで佛蘭西學の蘊奥を極むべく、開成所に學ぶかたはら、竹内玄同氏の家塾に入り、その頃、斯學の大家として著聞された入江觀寮氏に師事し、親しく其の教を受けたのである。』と書いてあるので、松江藩士以外でも文郎にフランス語を教えて貰つた者が存在したことが分る。竹内玄同について調査することにより、文郎のフランス語教授に関してより多くのことが分るかもしれない。

慶応二年丙寅十二月八日（一八六七年一月十三日）幕府は文郎を旗本に列せしめた。慶応三年丁卯四月（一八六七年五月）文郎は幕府の命令により横浜太田村に寓居して翻訳に従事し、五月（六月）江戸に帰り陸軍所の翻訳にたずさわり、それは翌年の春まで続いた。

藤田東一郎「入江文郎に関する研究」によると、文郎は慶応元年三月（一八六五年四月）には既に開成所教授手伝役に居り、同年五月二十八日（七月二十日）に、帝国学士院に蔵せられているフランス語の送別文を書いている。また、その論考には、中外新聞第十二号（慶応四年四月十四日）の紙上に掲載された入江文郎訳の資料が収録されている。田中貞夫『フランス学の研究』には、注8に先述の文郎によるフランス語送別文、本文中にそれと比較するため、小林鼎輔、林正十郎のフランス語送別文が転載されている。また、同書には、勝海舟『陸軍歴史』所収の文郎の日本語訳文も収録されている。そうしたものについては資料の章で再び言及することになるであろうが、フランス語の原文が発見されていないのは残念である。明治元年戊辰七月晦日（一八六八年九月十五日）文郎は職を辞して藩籍を松江藩に戻し、同年八月十日（九月二十五日）病氣療養のため横浜に行き、同年十二月十二日（一八六九年一月二十四日）開成所の二等教授に任ぜられた。同年十二月十九日（一八六九年一月三十一日）横浜から江戸に戻り、明治二年己巳正月二十日（一八六九年三月二日）から職に就いた。明治二年己巳七月二十七日（一八六九年九月三日）大学中博士に任ぜられ、同年十月二日（十一月五日）従六位に叙せられた。明治三年庚午十二月（一八七一年一月）には松江藩より家祿現米三十二石を給せられた。この三件に関する書類

(辞令)は後に述べる入江家所蔵として保管されている。

### 三、明治初年日本人フランス留學生總代

明治四年辛未正月二十八日(一八七一年三月十八日)文郎は学課質問のためヨーロッパに派遣されることとなった。この辞令も入江家に残されている。鈴木暢、小林儀秀と共に差遣されたのであるが、鈴木は二人より先に帰朝。その間の事情を示す資料も入江家に在る。それはさて置き、文郎は明治四年辛未二月二十七日(四月十六日)<sup>(4)</sup>日本を出発して、同年七月(八月)フランスに到着。そうした事は入江家に残されている文郎自筆の「西航備忘録」によつて知ることができる。これまでもこの「西航備忘録」は一部紹介されて来た。また、入江家に残されているその他の資料も部分的には種々の論考の中に収録されている。本篇及び続篇の目的は繰り返し述べる通り、そうした入江家所蔵資料の散逸を防ぐため、それ等をできる限り多くまとめて収録することにある。しかし、解説が不十分な資料もあり、すべてを掲載することはできないかも知れない。また、入江家所蔵以外の資料も別にあり、これから発見されることも考えられる。それ等も可能な限り収集したいものである。

ところで、文郎は明治四年辛未七月二十七日(一八七一年九月十一日)文部中教授に任ぜられた。政府が大学を廃して文部省を置いたためである。この書類も入江家に残されている。同年十一月(十二月)政府は文部理事官をヨーロッパに派遣して学校事務を調査させた。明治五年壬申正月二十七日(一八七二年三月七日)文郎は文部理事官と協議してこの調査をすることを命ぜられた。同年六月二十五日(七月三十日)文部省より帰朝の命令があつた。関係文書が

存在する。しかし、文郎は文部理事官に陳情して留学延長を願つたようである。理事官は文郎をして全權大使に事情を具陳せしめ、これにより文郎は後に許可を得たことである。同年九月十四日(十月十六日)文郎は文部省六等出仕に補せられた。明治六年癸酉二月(一八七三年二月)文郎は留學生總代に命ぜられた。いつの頃のものか正確な日付は分らないが、当時の留學生の名簿と考えられるものが、入江家所蔵の資料中に在る。文郎はその後度々帰朝しようとしたようであるが、病気のため実行できなかった。明治八年乙亥四月七日(一八七五年四月七日)付文郎自筆と思われる文部大丞宛手紙によると、昨年戊辰九月に帰朝の命令を受け早々出発すべきところ、病気になつたので、私費によつて療養して来た。しかし、「レウマチス」になつて未だ帰朝できないので、猶四五ヶ月療養させてほしい。私費で滞在したい旨が述べてある。それに対して明治八(一八七五)年六月十二日(但し受取は十月二十五日)の日付で文部大輔田中不二麻呂の印が押してある許可証が残っている。明治八年七月二十七日付で、入江文郎・今村和郎宛の東京開成学校監事・古賀護太郎、同学校校長補・濱尾新連名の手紙も入江家に残されている。それによると、文郎はお雇い外国人教師の人選などにも、この時点でもなお、関係していたことが分る。だが、『入江文郎先生之傳』に、同八年乙亥十一月先生書ヲ文部省ニ呈シテ淹留ヲ請ヒ且俸祿ヲ辭ス其書ニ曰ク私儀度々滞在之延期ヲ願ヒ昨年之末ニ至リ期滿チテ歸朝ス可キニ病ニ因リテ淹留ス當時會計ニ差支タルカ為ニ舊定祿三分一之滞ヲ申出テ即去ル十二月分マテ送致セラレ誠ニ満足之至ナリ療養滞在ヲ願ヒ許容ヲ得夫カ為ニ更ニ本年八月分マテ祿三分一ヲ送

致セラルは實ニ望中之事ニ非ス寛假度ニ過ク慚愧ニ堪ヘス何トナレハ病ヲ養テ淹留ス全ク私事ニ属スレハナリ而シテ今時猶癸程シ難シ餘リニ緩慢之次第ナレトモ猶幾月之稽緩ヲ請フ然レトモ此上祿ヲ私スルハ我靈識ノ許サザル所ナレハ本年九月ヨリ歸朝マテノ祿ハ謹テ之ヲ辭ス此段切ニ許容ヲ願フ」とあるが、筆者は寡聞にしてその資料の所在を知らない。その手紙の何処に保管されているのかの教示を得たくここに記す次第である。それはともかく、文郎はその後はこうして私費でパリに滞在し病氣療養を続けたと思われる。明治十(一八七七)年丁丑一月十二日廃官の理由で、文郎は六等出仕免官となる。

入江文郎は元來人と接することはあまり好まなかつたらしいが、病が重くなつてからはこの傾向は一層つより、亡くなる直前はこの人嫌いが特にひどくなつていたようである。客が来てドアをノックしても、大方はこれに応えず、只管読書三昧の日々であつたとのことである。部屋に招じられる者は、当時パリにいた日本人のうちでは、今村和郎だけであつた。従つて、文郎の当時の容子は今村によつてその詳細を知ることができたのである。

今村が或る日文郎を訪問すると、顔色が非常に悪かつたので、医者に診察して貰うよう勧めた。だが、文郎は、ヨーロッパの医者は皆売薬を業とする猾い奴で、生命を托するには足らないと言つて、今村が強く主張しても耳を貸さうとしなかつた。それから二・三日して今村がまた訪れると、文郎は自分の病氣は毎日進行して、この頃は朝晩僅かスープ一杯と鶏卵一個を食するのみとなつた。患部が咽喉にあるので飲み食いができないのだ。好きな喫煙も今は止めて

いる。それに読書も疲れるので新聞一枚を読むのがやつとだと言ひ、非常に衰弱している様子であつた。今村がまたしきりに医者に診て貰うように勧めたので、今度は文郎も遂に承諾した。今村は急いで医者を迎えに行き、医者はやつて来て文郎を診察し処方箋を書き、この薬を買いなさい、明朝器機を使ってこの薬を咽喉に塗りましようと言つた。医者が帰る時今村はついて行ってそつと文郎の病状について質問した。医者は病因は肺に在る、気管の「燄衝」がひどい、この薬を咽喉に塗るのは一時的に苦痛を減少させるためだけだと言つた。また、この病人故郷に親族があるのなら速かに故郷へ帰つた方がよい、そうでないと再会することはできないだろう、もし親族がいらないならば、速やかにイタリアの暖かい地方へ転地して療養すべきだとも言つた。今村があとどのくらいの寿命かとたずねると、まだ二、三ヶ月はもつだろうということであつた。今村はこれを聞いて愕然とした。今村が文郎の部屋に戻つてみると、文郎は処方箋を読んでいて、中に劇薬が入っている、「庸醫」に治療させてはならない、速く行つて医者に断り、もう来なくとも良いと言つてくれと言つた。今村は文郎と言ひ争つたが、文郎が承知しないので、そのわけを医者に話し往診を断つた。その後三日して文郎が死んだという知らせがあつたので、今村は直に文郎の宿舍へ行つてみたが、もう助けることはできなかつた。日本人でパリ在住の者が文郎の宿舍に集つて文郎の埋葬の相談をした。しかし、その費用の出所がなかつた。これより以前のことだが、文郎は今村に言つていた。二、三月になつて暖くなるのを見計つて北米を旅行して故郷に帰ろうと思うと。今村はこの言葉を記憶していたので、考えた。文郎は嘘を

吐いたことがない。それに、資金なしで旅行を計画するような人ではない。だとすると、きつと貯金があるに違いない。今村は之を皆に告げ、行李を開いて検査したが、一銭も見当らなかつた。皆は相談して、文郎の遺した物を売って金をつくろうとした。しかし、今村は更に考えて、文郎の人となりからして、一銭の貯えもないのに安閑として異国に滞在するようなことはあり得ない。それで、もう一度調べ直し、手紙や手帖の類も取り出し、全部検索してみた。すると、果して、手紙の中から一千餘円の金が出て来た。この金を葬儀の資金として用い、文郎の体面を汚さずにするだということである。葬儀の案内の文書などが入江家所蔵資料中に残っている。文郎が亡くなったのは明治十一(一八七八)年戊寅一月三十日である。宿舎はパリ第六区カジミール・ドラヴィーニユ通り七番地・ホテル・サンシユルピス。享年四十五歳。駐仏日本公使館の官吏及び日本人留学生等<sup>6)</sup>が相談して、二月一日モンパルナスの墓地に文郎を埋葬して墓碑を建立した。

この章冒頭でも述べたが、文郎には姉が一人あり、「シズ」といった。広瀬の藩士野津栄に嫁した。野津家には二人男の子があり、長男は官太郎、次男は美禰三郎といった。美禰三郎は後に改名して元義と名乗った。明治十(一八七七)年一月、野津栄はパリの文郎に手紙を送り、元義を文郎の後継者とするを謀った。文郎客死後親類が相談して之を決定した。元義は「伝記」編纂当時は陸軍砲兵中尉、後に中佐まで栄進した。この相続についての資料も入江家に残されている。『入江文郎先生之傳』によると、文郎は早くから大学にあつて仏学の「興起」をもつて自任していたとある。フランス学

が日本で進歩したのは文郎の尽力のおかげであることは多くの人々の認めるところである。

文郎はかつてオーギュスト・コントを「景慕」して実験哲学を修め専ら之を研究し、パリに留学するようになると、深くコントの説を信捧し、コントの定めた修学の順序に従つて諸種の学を復習したといわれる。また、フランス人が文郎に日本の医学の状況をたずねたり、学術上の質問をすると、文郎は詳しくその解答を与えた。フランス人は文郎の博識を賞讃したという。それらのことを傍証するものも存在するが、入江家所蔵の資料ではない。文郎に著書があつて、その稿本が彼の遺品の中に在り、題して *Le Cercle de (du) savoir* といったそうで、哲学に関する文郎自身の思想を述べたもので、パリ滞在中にフランス語で書いたものであるようだが、それは未だ発見されていない。

## 資料

### 一、資料の概要

入江文郎の事績を傍証する資料は大別すると次の二つとなる。一つは入江家所蔵のもの、もう一つは入江家が所蔵していなかったものである。後者は研究者の調査によつて見出されたもので、便宜上その他の資料として置く。本章では前章で言及した通り、入江家所蔵資料の散逸を防ぐため、その資料収録を目的としているので、これについて、まず説明する。但し、紙幅の都合で本篇にはほんの一部しか掲載できない。資料の説明もこゝでは概要に止める。



## (A) 入江家所蔵資料

入江家所蔵資料とは、具体的には、文書（辞令、通達、手紙、通知、備忘録、控等）、写真、名刺、掛軸等である。内容によって分類すると、文郎のフランス留学以前に関係するものと、フランス留学時代に係るものとすることもできる。前者は後者と比べて数が少ない。名刺と写真は、文郎自身の写真を除き、これまでどの論考にも掲載されたことはない。藤田東一郎「入江文郎に関する研究」ではどちらも枚数等については既に報告されている。文書については、西航備忘録、「留学生名簿」など、これまで、幾つかの論考の中で既に紹介、転記されているものもある。しかし、辞令、通達の類は殆ど掲載されていない。掛軸も紹介されたものはあるが、その写真などは掲載されていない。本篇では不可能だが、こうした入江家所蔵資料は、他日、すべて収録したいと筆者は考えている。

## (B) その他の資料

便宜上その他の資料とするが、先述の通り、大部分は研究者の調査によって、入江家以外で見出されたものである。例えば、『幕末洋学者欧文集』中の文郎のフランス語送別文等である。それに文郎直筆と推測されるフランス語の手紙草稿等が加えられる。

## 二、本篇掲載資料

(A) 日本人の写真（氏名不詳のもの） 入江家には、文郎自身の写真二枚と日本人留学生と推測される人々の写真が十九葉残されている。その中四枚には裏面に氏名等が記されている。市川文吉、庄司金太郎、松本白華、山田正才の写真である。また、もう一枚の裏

には、「尋知 橋本拜」と読み得る記述がある。裏に何も記されていないが、偶然氏名が判明したものととして、飯塚納の写真がある。井田進也著『中江兆民のフランス』（岩波書店 一九八七年）の扉に掲載されている数枚の写真の中に全く同じものがあり、「飯塚納」と記されているので特定できた。尚、市川文吉はフランスへの留学生ではなく、ロシアへの留学である。松本白華もフランスへの留学生ではない。氏名不詳の者の中にも留学生ではない人物もいると想像される。本篇では紙幅の都合及び公表して置けば多数の人の目に触れ、特定される機会もふえることを期待して、こうした氏名不詳の人物の写真をまず掲載する。

(B) 西洋人の名刺、入江家に残されている名刺には日本人のもの、西洋人のもの、二種類がある。前者は当該人物について殆どが調査可能である。後者はBousquet, Durieuxのように、良く知られていたり、ベルギー人と記されていたりして、それほど良くは知られなくとも、より深く調査が可能と考えられる人物のものもあるが、文郎とどのように係るのか全く不明の人物のものもある。ここでは、多くの情報入手を期待して、西洋人の名刺を先に掲載する。日本人の名刺は続篇に収録し、人物については可能なかぎり説明を付すこととする。





*Le Docteur P. J. Dutricaux,*  
 Médecin militaire belge.

ALBERT DU BOUSQUET  
 CAPITAINE D'INFANTERIE  
 ATTACHÉ AU CONSEIL D'ÉTAT DE S. M. L'EMPEREUR DU JAPON  
*7 rue de Courmon*  
*Hotel du Sénat*

*Madame Bénard.*

ASONGLES  
 Commissaire de Police  
*Paris*

*Eugène Garnier,*  
 Chef d'Institution.  
*Paris 1900<sup>+</sup> par an;*  
*Bourg-la-Reine (Seine).*

*E. Peschard,*  
 Chef d'Institution.  
*46, rue de Fontenay - Vincennes.*

A<sup>e</sup> CARRIOL  
 Vieux Chemin de Rome 40

*M. Labrunet*  
*7, rue Casimir Delavigne.*

HOTEL ST ROCH  
 MADAME FRÖHLICH  
 13, Rue St Roch.  
 PARIS  
 ENGLISH SPOKEN

*E. Derode*  
 1, rue Casimir Delavigne -

*Remy Deviers*  
 DEVIERS  
 28 rue Racine

*Paul Schwaebli*  
 Directeur de l'Ecole supérieure du Commerce  
 de Paris.

*E. Carles*  
 Professeur au Collège Chaptal.  
 11, rue de St. Petersbourg.

AUGUSTE LEBRUN  
 7, rue Casimir Delavigne.

*N. Solignac*  
 Colonel d'Artillerie en retraite  
 Sous-Directeur de l'Ecole Centrale  
 11<sup>e</sup> de Directeur  
 20, rue de la Harpe

*S. Bouche*  
 Négociant  
 Export en Douane  
 21 de la Ville de Paris  
 29, Boulevard des Italiens.

(51)

おわりに

入江文郎に関して、中村元編『日本最初の建築家』山口半六——資料・覚え書——のような冊子を作成する計画は、筆者が広島から松江へ移って三・四年後(昭和五十八年頃)、今から十二・三年前から、筆者は想い着いていた。千葉市武石町の入江家を訪れた時、令孫尚子氏にその計画について相談したことを筆者は記憶している。しかし、事情があつて、その計画は実現しなかつた。そうこうしているうちに、平成六年、筆者は松江を去り、古巣広島へ帰還することゝなつた。これを機会に、従来の「松江とフランス」よりもっと調査範囲を拡大して、「日仏交流・中国地方・四国地方篇」に着手することとした。そして、皮切に「広島とフランス」について調べようと筆者は考えたのである。その際、渡六之助、太田徳三郎、船越熊吉の名が「西航備忘録」にあつたのを想い出し、彼等に関する具体的資料の入手と積年の宿題を果すべく、入江家を再び訪れたのであつた。尚子氏は既に他界されていたので、曾孫昭彦氏にお願いしたところ、同氏は心良く承知して下さり、入江家所蔵資料の殆ど全部を筆者に貸与して下さつた。その中には、未だに判読し得ていない文書もある。かなりの量を、とりあえずまとめ、「資料篇」を作成してはあるが、『山陰地域研究』に連載して頂くならば、これまで、松江に関するものは、『山陰地域研究』に発表して来たので、都合と筆者は考えた。たゞ本篇に全てを収録できなかったのは遺憾である。入江家に対し、筆者は深くお詫びしなければならぬ。

本篇の続篇を早く上梓したいので、毎度ながら、篤学の士の御協力を乞い願う次第である。特に手紙など読解の件で御教示をお願いしたい。

注

- (1) 本章は主として土屋政朝『入江文郎先生之傳』(佛學會編 明治廿四年十月廿四日出版)に依つてゐる。引用は主としてこの文献からである。このほか、入江文郎自筆「入江文郎旧藩中事跡」、藤田東一郎「入江文郎に関する研究——帝國學士院藏幕末洋学者欧文集の佛文の執筆者たる——」(昭和十二年九月十二日報告)(日本學士院紀要 昭和二十三年三月)、同氏「西園寺公から明治初年佛國留學生の總代入江文郎について」(『書物展望』十二月号 昭和十五年十二月一日発行)、高橋邦太郎「日仏の交流」(一九八二年五月一日発行 三修社)、田中貞夫「幕末明治初期 フランス学の研究」(昭和六十三年十月三十日発行 国書刊行会)、桃裕行「松江藩の洋学と洋医学」(『松江藩と洋学の研究』桃裕行著作集6 一九八九年十一月十八日発行 思文閣)等を参考としてゐる。
- (2) 太陽曆による日付を併記するが、正確でないものもある。
- (3) 安部季雄編『伝記叢書20 男爵 辻新次翁』四十ページ〜四十一ページ 昭和六十二年九月二十一日発行 大空社
- (4) 藤田東一郎「入江文郎に関する研究」(前掲)一〇〇ページ及び田中貞夫「フランス学の研究」(前掲)四四七ページでは、三月十六日となつてゐるが、四月十六日が正しいと思われる。文郎自身が「西航備忘録」に三月十六日と書いてゐるが、同備忘録の別な箇所では四月十六日と正しい日付を書いている。
- (5) 富田仁「入江文郎と仏蘭西学・墓と顕彰碑」(『日本仏学史研究』第六号 八ページ 昭和五十六年六月)によると、届出人は公使館員熊崎某と学生栗塚省吾である。